

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

唐代的術数与思想

——吕才与《阴阳书》

(唐代の術数と思想—呂才と『陰陽書』—)

氏 名

李 錚

論 文 内 容 の 要 旨

『陰陽書』は唐代の学者呂才(590?~665)によって編修され、貞觀十五年(641)唐政府によって刊行された中国最初の大型術数叢書である。『陰陽書』の本文はほぼ散逸したが、三篇の序文「叙宅經」・「叙禄命」・「叙葬書」及び日本所蔵の『大唐陰陽書』のテキストは現存している。本論文は、現存する『陰陽書』の内容を通して、該当書物の成立背景・意義・後世への影響を明らかにすることで、術数思想に反映された中古期中国の社会文化について検討するものである。

本論文は六章で構成される。

第一章「呂才の生涯と著作」では、呂才の生涯とその著作に関する基礎的研究を行う。彼の生涯については、いままで注目されていなかった生年と官歴の問題を中心に検討する。呂才の生涯と著作・思想を再整理することで、『陰陽書』の成立背景と同書の持つ意義を考察する。

第二章「五姓法と『叙宅經』の批判」は、時代順に三つの部分から成る。本章では、呂才が書いた序文の一つである「叙宅經」に言及された相宅術の五姓法を中心にして、この術の由来・変化・繁栄及び消滅までの過程を考証する。第一節では、五姓法の形成期である先秦時代から後漢までを取り上げる。陰陽五行説の影響を受け、民間では人の姓を発音によって五音(宮・商・角・徵・羽)に配属する占術が誕生した。第二節は、魏晉南北朝時代における「宅無吉凶」という命題に対する論争に着目する。「宅無吉凶撰生論」一連の文章から、魏晉時代の士人の術数に対する理解と信仰が見える。第三節は隋唐時代を取り上げる。この時期は五姓法が多様化・複雑化する時期で、敦煌文献の五姓宅經文書から見ると、時代とともに術法が変化していることが判明する。呂才は「叙宅經」において、五姓の術は出典や根拠がなく、姓氏学の理論にもふさわしくなく、義理がねじまがっていると論じた。この観点はのちに五姓法の消滅の原因になった。また、「療服石方と鎮宅文」を附論として、敦煌宅經研究の一部分である鎮宅文に関して考

察する。附論は二つの内容に分かれる。第一部分では、「療服石方」と命名された二つの敦煌写本 S.9936R と S.11363 の内容を検討する。これらは薬方を記したものとする説と鎮宅文とする説があるが、本論文は魏晋時代に流行した五石薬方とこれらを比較することで敦煌鎮宅文の一種である「石鎮宅法」とする説を支持する。第二部分では、敦煌鎮宅文と宅経研究に関する最近 20 年間の研究史を整理する。

第三章『叙禄命』と唐代の禄命術では、唐代の禄命術の特徴を考察する。第一節では、呂才「叙禄命」の内容に基づいて、伝統的な禄命術の特徴を解説する。第二節では、外来文化の影響によって唐代に流行した星占いの一種である禄命術について考察する。第三節では、呂才と関連性がある二つの敦煌文献を利用し、唐代の占婚術（婚姻に関する占術、基本的な作法としては禄命術を使う）を考察し、当時の「周堂嫁娶図」の復元を試みる。

第四章『叙葬書』と唐代の葬日選択は、唐代の葬礼を考察し、民間葬礼の特徴を検討する。第一節では、呂才の「叙葬書」に合わせて、当時の民間葬礼における「非礼」の現象について考察する。第二節では、敦煌写本 P.2534「陰陽書卷第十三葬事」を中心に、葬礼の日付を選択する方法を解説し、呂才が批判した民間葬書の内容を明らかにする。第三節では、貞観十六年から天宝元年まで（642～742）の李氏墓誌 95 例を考察し、『陰陽書』が刊行されてから百年間の葬式の日取りの変化を解明する。これらの考察から術数思想の変化と時代の変革との関係を明らかにする。

第五章「京都大学蔵『大唐陰陽書』補正と葬事択日研究」は、三つの部分に分かれる。第一節では、日本に所蔵する『大唐陰陽書』と呂才主編の唐『陰陽書』との関係・日本に伝来した時期・影響を検討する。第二節では、京都大学蔵『大唐陰陽書』をめぐって、内題・奥書の意義を討論し、その中に数箇所脱落・誤記を発見し、内容の補正を行う。第三節では、京都大学蔵『大唐陰陽書』写本を中心に、葬式の凶日である「大禍」と「滅門」の適用規則について検討し、中国中古期の葬式凶日の意義の変化について考察する。

第六章「日本国立国会図書館蔵『大唐陰陽書』と日本中世の八将神信仰」は、大きく二つの部分に分かれる。第一部分では、日本に現存する『大唐陰陽書』の七つの写本について調査し、国立国会図書館蔵本と天理大学附属天理図書館蔵吉田文庫本との関係を考察したうえで、『大唐陰陽書』の七つの写本に「春家本——賀茂氏本——安倍氏本」と「安倍氏本——宣賢本——吉田（卜部）家本」という二つの写本系統があることを明らかにする。第二部分では、国立国会図書館蔵『大唐陰陽書』を中心に、古代の暦日・暦首の書き方を考察する。日本中世以来、暦首に書かれる「八将神」の由来・釈義を分析し、それと中国本土の同名の神との区別を明白にすることで、日本における術数思想の展開についても論じる。